

書評

金子武藏「實存理性の哲學」

—ヤスバース哲學に即して—

大友 久 由

この書は副題の示すようにヤスバース哲學に關するものであるが、著者の意圖はこれを「實存理性の哲學」として特徴づけ、從來一般に實存哲學に非合理主義の印象がもたれることに對して警告される所にあろう。先ず序文に於て、著者はヤスバース哲學が實存理性の哲學として出現すべきプロセスを、他の哲學者との關係に於て、懇切に述べておられるが、紙面の都合上、簡単に紹介しよう。さて實存哲學はケルケゴールに始まるが、彼の哲學はヘーゲルの理性主義に對抗して生れた。

所が對抗もまた一種の關係であつて、彼自身は理性或は精神のイデーに解消しきらない人生の暗黒面を凝視しつゝ、個別者を超越者に關係づけ、實存者として確立することに努力したといへ、彼の實存はまだ抽象的であり、直接性を免れなかつた。だからそれはヘーゲルの理性に、またこれを通じて悟性に媒介されているのであつて、この媒介過程を併せ考えるとときにのみ、初めて絶対的となり完成するのである。では實存理性は悟性及び理性と如何なる關係に立つか。ヘーゲルは悟性に理性

を對抗させ、悟性の抽象を究極まで行かしめることによつて、これを内在的に超越しようとした。かくて彼に於ては悟性は理性に轉じ、悟性が相對性の故に極めて客體的たると共に、また極めて主體的なるものとして、免れることのできない主客の對立もまた克服された。だから彼に於ては、悟性と言つても理性的悟性たるごとく、理性と言つても悟性的理性である。第二に彼の理性は歴史的現實に根ざし、宗教的人倫的生活と深く連關を保つためむしろ精神となつてゐる。第三に彼は悟性の主客對立の偏重を主體と主體の對立に矯正し、精神のイデーを人間共同體の支柱とした。

これらの諸點に於て、實存理性はヘーゲルの悟性的理性と一致する。しかしヘーゲルの悟性克服は性急であつた。彼は本來假設たるべき精神のイデーを完結する體系としたために、理性を「交りの理性」たらしめることが出来なかつたのである。カントは個々の範疇が所與直觀に適用されて、經驗的認識の成立することを説くだけで、範疇或は原則の體系を展開しなかつた。しかし彼に於て經驗主義と先驗主義とは表裏一體をなすから、彼にも諸範疇の統一はあり、これが經驗類推の原則である。だがこの原則が經驗的思惟一般の公準として要請されるのは、それが既にイデーだからであり、イデーをイデーとして定立するものは、もはや悟性ならぬ理性である。理性のイデーをカントは、心理學的と宇宙論的と神學的とに分けたが、超越的主體と超越的客體とは一致するから、イデーは結局神學的となる。即ち、神或は神の國に於てイデーは完結した體系をなす。

ここにヘーゲルと同じ誤謬が存在するかと思われるが、それはない。彼は全體性というイデーの本質に基づいて、それを體系たらしめたが、彼に於てイデーは假設たるにすぎず、檢證の末、自由に變容さるべきものである。ここに彼の理性は超越者を開放すべき無限の廣さをもち、實存理性と全く一致する。しかし彼の理性のイデーは假設にすぎないから、これを自由に變容する實存者としての個的主體の存在を承認すべきであるが、カントは承認していない。これは定言命法に於て明かである。定言命法に於て格率とは、各個人が己れの生活上の根本方針とするもので、それ自體では個別的主觀的なものであるが、この格率が、常に同時に普遍的立法の法則となり得ることく行爲せよと命ぜられるのであるから、この限り定言命法は、一應先驗的綜合命題であるが、彼に於て倫理的實踐的なものは、格率の内容如何ではなく、たとその普遍性的形式のみに存するのであるから、この命法は漸次その綜合性を喪失して同一性命題に歸してしまふ。かくて彼の倫理學は感性的個別的なるものには何らの意義を認めず、たと何人に移しても妥當するような普遍的な行爲を命じ、人間性の尊嚴も一律なものにすぎなくなる。次にニイテュもまた理性を拒否したが、これは確實でないものを確實であるかのように思いこむ妥當な態度を好まなかつたからである。彼のこの誠實さは解釋學或は神學主義に遠くがこれはまた自由精神とも呼ばれる。これは直接的には破壞的に働き、クリスト教信仰も神も崩壊されるが、この破壞的に見える立場から自由精神には却つて新しい超越者が現成しているの

である。實存理性は可能性の空間を開放する點に於て、この自由精神と一致するものである。更に運命愛の思想は、ニイテュが實存を限界狀況に即してとらえていたことを示すものである。だから彼の自由精神は無限の廣さをもつが、運命愛の側面から言えば、それはまた極端な狹さをも具えるものである。

しかし大局から言えば、ケルケゴールに於けると同様に、ニイテュに於てもまた實存主義はまだ直接的無媒介的に登場している。然るに獨自の方法論を以て實存主義を確立したのはヤスパースである。彼は實存を、現存在と意識一般と精神とによつて媒介し、實存がこれら三者と分離すると同時に結合するという理由によつて、媒介の營盤として理性の概念を立てたが、この獨自の理性に於ては、悟性にも精神(ヘーゲル内理性)にも意義が認められるのみならず、それはまた交りの理性でもある。

ヤスパースに於ては、なお實存と理性とはやゝもすれば分離せんとする傾向をとゞめるにしても、根本性格としては實存理性と呼ばれるべきものであり、實存を理性化するのみならず、理性を實存化して兩者を一體化しようとするこの獨自の理性こそは實にヤスパース哲學に於ける最も重要な概念であるとして、著者はこの角度からヤスパース哲學を取り上げられるのである。

序次に續いてこの書は、一、ヤスパース哲學の立場と方法、二、ヤスパース哲學の基礎問題、三、緒論、の三章に分れ、更に全體を通じて十三節に分れているが、著者はこれを、(一)精神史的反省、(二)倫理學、の兩點からみるために、ヤスパース著作中「哲學的倫理學」と「哲學的信仰」を理性と實存の兩翼と考へ、

その何れにも偏らず相即するものとして、かつ彼の哲學が交りの哲學であることを強調して、資料としては最も多く彼の主著「哲學」を用いられている。次にこの書の内容の中心點を概観すると、先ず實存の問題は實踐の問題であるから、自由論に初まり、科學と技術の問題を通じて限界狀況論に進み、二律背反を経て包越者に達する。包越者とは、超越者を主體の側から見たもので、眞理自體のことであるから、認識の問題はこゝで終るが、實存哲學は元來實踐の問題であるから、再び實踐に歸る。實踐には自由が、換言すれば可能性が必要であるが、必然性と游離した可能性は現實性をもためから、こゝで可能性と必然性の對立が論ぜられるが、これは既に包越者の哲學を通じた立場からであり、絶對意識論が結論として重要な意味をもつのである。

ところで最初に述べたように、この書の骨圖は實存哲學が、從來非合理主義的印象をもたれるのに對し、理性を媒介としてこれを實存理性の哲學として考察されるところにあるが、これは確かに著者の卓見であり、精神史的にも必然のことであらう。しかも著者の態度はヤスバースのみならず、他の哲學者についても實に懇切である。しかし理性と實存の結合が如何にしてなされるかと言うことは重大な問題であり、著者も認めておられるが、ヤスバースに於ても兩者はやくもすれば分離の傾向にある、しかも彼に於て理性は實存の媒介となるよりむしろ折衷されているという感が深い。この點にまだ根本的な問題が残されているところである。この問題は結局、理性の性格がはつきりし

なくては解決されないが、ヤスバースに於て理性は、「包越者のあらゆる様態の紐帶」「理性」(四五頁)とか、「理性は統一に迫つて行く」「理性」(四七頁)とか言われ、また理性はそれ自身としては何等根源的ではなく無内容であり、従つて、「實存なき理性は空洞(Tohn)である。理性とは單なる理性としてのものではなくして可能的實存の行爲としてのものである」「理性」(四八頁)等と言われているが、積極的に理性とは何であるかが彼に於ては十分明瞭ではない。

次に交り(Kommunikation)の問題はやはりヤスバースの重要な概念であるが、これが果して理性のみで處理され得るであらうか。著者はニイチエの運命について述べられた後で、「かく必然なるもの醜惡なるものから眼をそらすにこれに親しむ愛情がヤスバースの理性である」(一九七頁)と言われる。だからヤスバースに於て、理性と愛との結合が考えられていることは明かであるが、愛の理性化の可能性が残された問題である。更に愛情や理性で交りの問題が處理出来る可能性は、家族とか親友とか、比較的小さな人格關係のサークルに於ては認められるにしても、國家とか社會とか大きくなればなる程實存と非實存の連続の矛盾が大となるのではなからうか。これに關連するが、著者はヤスバースの社會性の不足についての非難に對して、「これは必ずしもあたらぬ」(二一八頁)とされ、また「社會や國家は彼にとつて實存的意義をもつ」(二一九頁)と述べておられるが、根本的に考へれば彼の哲學に於てはやはり社會性の考察について、積極的な態度が足りないのではなからうか。

「實存性」が形式的「有軸的」な機軸の古服という電六の課題を果す
ためには、以上の點をより明瞭にする必要があるのではないか
と思われるのである。(了)

金子武藏「實存性の哲學」

——「オクスフォード哲學」に於て——

昭和二十六年六月二〇日 弘文堂發行 三七六頁

(筆者 京都大學文學部倫理學「大學時學生」)

前 號 目 次

實踐的推論(終)……………安藤 孝吉

——「マロウ・ア・サ・バート」に於ける「善」の論議——

デカルトにおける判断論の問題：鈴木 茂

——「物質の存在証明」に於て——

書評 H. J. S. Ueberweg「歴史の論議」(西島嘉郎)

海外書評「新書目録」

新着外國雜誌所載論文一覽

一哲 學 一

MIND, Oct. 1951.

Cross, R. C.: Logos and Forms in Plato.

Bennett, Jonathan: Meaning and Implication.

Holland, R. F.: The Empiricist Theory of Memory.

Weitz, Morris: Analytic Statements.

Pinsky, L. O.: Positivism and Realism.

Henderson, G. P.: Causal Implication.

PHILOSOPHY AND PHENOMENOLOGICAL RESEARCH,

Dec. 1951.

Kaplan, Abraham: What Good is "Truth"?

Benjamin, A. Cornelius: A Definition of "Empiricism".

Marias, Julian: Presence and Absence of Existentialism

in Spain.

Bunge, Mario: New Dialogues between Hyllas and Philo-

nous.

Weismann, Astriel: Relations of Causality in the Course

of Nature.

Laffeur, Laurence J.: The Meanings of Good.

Linsky, Leonard: On Understanding Philosophical Wri-

tings.

Leidecker, Kurt F.: Concepts by Intuition and the Nature

of Sanskrit Philosophical Terminology.